

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	三代 舞
論文題目	仏教論理学派における対象認識論の成立と展開
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、インド後期大乘仏教における仏教論理学派の知覚論をテーマとし、特に、対象認識の構造を考察したものである。仏教論理学派の創始者といわれるディグナーガ (ca. 480-540)、大成者ダルマキールティ (ca. 600-660)、そして、後継者の中からダルモータラ (ca. 740-800) とプラジュニャーカラグプタ (ca. 750-810) という2人を選び、認識の内部に現れる対象形象と対象認識との関係、更に、知覚による対象認識から行動へのプロセスといった問題について、これらの学匠がどのように考えたのかを分析し、思想的展開の解明を試みている。</p> <p>まず、本論文第1部の第1章では仏教論理学派における対象認識の全体像を先行研究の紹介と共に丁寧に記述する。次に、第2章では、プラマーナすなわち認識手段という語のもつ二つの意味とその関係について、仏教論理学派による理解とニャーヤ学派による理解との比較を行う。その比較を通して、仏教論理学派によるこの語の転義的用法は、認識手段と認識結果の非別体説という仏教論理学派独自の思想的立場に由来する、という点を明らかにしている。</p> <p>第3章では、ディグナーガからダルマキールティに至る間に見られる、対象認識論の成立について扱う。特に、対象認識論において中心的な位置を占める、認識手段と認識結果の非別体説について、ディグナーガの <i>Pramāṇasamuccaya</i> の第1章と、ダルマキールティの <i>Pramāṇavārttika</i> の第3章 (= PV III)、および <i>Pramāṇavinīścaya</i> の第1章 (= PVI I) の記述を分析する。認識手段と認識結果との関係について、ダルマキールティの「認識手段たる対象形象が、認識結果たる対象認識を区別する」という重要な規定を提示する。そしてこれがディグナーガには見られない見解であることを指摘する。更に、PVI I の記述に基づいて、対象の形象をもつことが認識手段であるという定説を導く論証の構成を明らかにしている。この成果により、これまで必ずしも十分に解析されていなかったダルマキールティの認識手段説の内容がより明快な形で示されている。</p> <p>第4章および第5章では、ダルモータラとプラジュニャーカラグプタによる認識手段と認識結果の非別体説に対する解釈の違いに焦点をあてる。第4章では、<i>Nyāyabinduṭīkā</i>, <i>Pramāṇavinīścayaṭīkā</i>, <i>Laghuprāmāṇyaparīkṣā</i> の記述に従って、ダルモータラの理解の概要を明示する。次に、第5章では、プラジュニャーカラグプタによる対象認識の理解を取り上げ、これまで解読研究がなされていなかった <i>Pramāṇavārttikāḷaṃkāra</i> (ad PV III 311) の解読を行う。写本や注釈、チベット語訳を用いてサンスクリットテキストの再校訂を行う。続いて、そこでの対論者がダルモータラであるという注釈の指摘を手がかりに、実際のダルモータラのテキストにその内容を跡付ける。その結果、前章で取り上げたダルモータラの説に対して、プラジュニャーカラグプタが批判的な態度を示している、という点を指摘している。これは本論文の研究成果である。</p> <p>第6章では、以上の論考により明らかにされた内容をまとめる。本論文の主要な成果であるダルモータラとプラジュニャーカラグプタによる対象認識に対する解釈の違いは、以下の如くである。仏教論理学派において、知覚は分別すなわち概念的構想を離れたものであると定義されている。その場合に、知覚がどのように対象認識という作用を完了し、対象への行動といった後続するプロセスを引き起こすかという点が争点となる。そこで、ダルモータラが、知覚と後続する分別知（決定知）とを組み合わせるのに対して、プラジュニャーカラグプタは、そのような分別知の存在を否定し、あくまでも知覚単体で作用を完了するという立場を採る。これが両者の解釈の相違点である。その場合にプラジュニャーカラグプタが知覚に対して反復経験とい</p>	

う前提条件を付加しているという点は、重要な指摘である。何故ならば、反復経験が対象認識に寄与する役割を解明することによって、ダルモータラ説とプラジュニャーカラグプタ説との解釈の相違を説明するための契機を見出すことが可能となると思われるからである。この反復経験と対象認識の成立との関係、特に決定知との関係の分析は、今後の課題となろう。

本論文の第2部には、Pvin I 30, 9-32,10 (vv. 34-37) に関する文献学的解読研究の成果が次のようにまとめられている。1. 科段、2. サンスクリットテキスト・チベット語訳テキスト対照表、3. 和訳、4. ダルモータラ註のチベット語訳テキスト、5. ジュニャーナシュリーバドラ註のチベット語訳テキスト、6. プトン註のチベット語訳テキスト。

本研究による特筆すべき成果としては、ダルモータラとプラジュニャーカラグプタの対象認識論について、先行研究が手薄な中で両者の間に明らかな対立関係があることに着眼し、その相違点を鮮明に描き出したという点が挙げられる。更に、文献学的には、問題の多いサンスクリットテキストの刊本に対して写本やチベット語訳を用いて校訂を施した上で複数の註釈を用いながら精密な原典解釈を提示している点が挙げられる。

以上により、本論文は博士学位を授与するにふさわしい論文であると判断した。

公開審査会開催日	2014年 11月 28日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院教授	Dr. Phil.(ハンブルク大学)	印度哲学・仏教学	岩田 孝
審査委員	早稲田大学文学学術院教授	博士(文学)(早稲田大学)	仏教学	大久保 良峻
審査委員	東海大学清水教養教育センター准教授		印度哲学・仏教学	瀧川 郁久
審査委員				
審査委員				